

アニメーション作品を取り入れた心理学授業の実践 —「移行対象」と「ドラえもん・おばあちゃんの思い出」—

下坂 剛

(四国大学生生活科学部)

1. 大学の授業にアニメを使うこと

本発表では、筆者が初めて大学の心理学の授業の中で、アニメ作品を題材として取り入れた授業についての説明と、学生の反応について述べる。副題に示すように、本発表で紹介する授業は、「移行対象」という心理学における専門用語と、アニメ「ドラえもん・おばあちゃんの思い出」の一部の内容をリンクさせたものである。なお、「移行対象」は、概して「寝るときに子どもにとってぬいぐるみや毛布が大切なこと」を意味する。

この授業を発案したのは、前任校で学生に授業をしている時期であった。詳細は省略するが、前任校は地方都市の小さな短期大学で、保育者（ほとんどの養成校は保育士と幼稚園教諭二種を合わせて取得する）を養成する短期大学生に対する授業を行っていた。しかし、授業内での私語はかなり多く、集中力を持続できず、講義内容に対してなかなか興味をもてない学生が半数以上いるような状況であった。そうした中で、今の若者が最も受け入れやすい媒体について考えたとき、それがアニメーションや漫画だった。漫画を授業内でスライドなどで共有するのはなかなか難しい。アニメーションの方がかなり使いやすい。初めて授業でアニメーションを見せたとき、大学生の反応は新鮮であった。保育者養成学校ということもあったが、それは保育士が園児たちの注意をうまく手遊びなどで引き付けるがごとく、学生たちは普段と打ってかわって一斉に前を向くのである。まさに大学生とはいえ、受講生諸君は幼児のような無邪気な反応であった。普段授業をしている身としては、大変複雑な思いをもった。

しかし、「これはいける！」という手ごたえは、授業が終わってすぐ感じた。テーマに掲げた「移行対象」という言葉の重要性がほとんどの学生の

中に吸収されていると感じられたからである。また、一人の学生が感想に書いていた内容として印象に残っているのは「大学の授業でアニメをみるなんて新鮮でした」というものである。本来、大学では文献や論文といった資料に依拠して授業すべきかもしれない。しかし授業内容に学生がなかなか関心を示さない場合、意外な媒体を使うということも一つの可能性と考えている。

2. 授業の内容

①受講学生：短期大学生約 40 名

②授業科目：「保育臨床相談」幼稚園教諭二種免許に要する科目であるが、ほぼ全ての学生が受講。

③配布資料「幼児期のこころの世界」

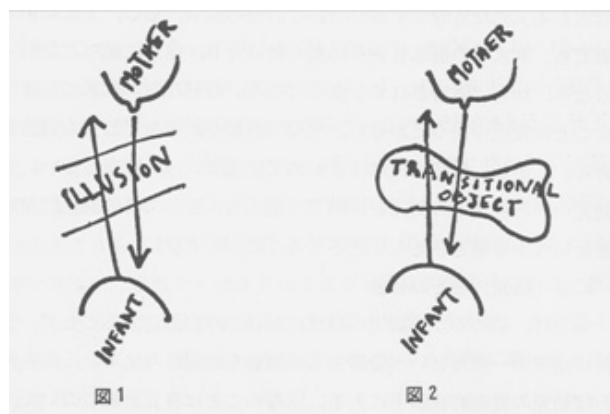
PPスライドでも紹介するが、次のような内容である（□は授業プリントの項目）。

□遊びの意味

喜び・快楽、自発性、それ自体が目的、生活適応の方法、非言語コミュニケーションなど

□赤ん坊のお気に入り

移行対象とはどんなもの？



＊ウィニコット（1971）「遊ぶことと現実」より抜粋

（子どもに所有権，サンドバック，保存性など）

□幻想と移行対象—母子の共有感覚

□保育者になったときの移行対象への対応

④アニメ題材：DVD：ドラえもん「映画おばあちゃんの思い出」小学館，2004年
 <物語のあらすじ>冒頭で、のび太がつぎはきだらけのクマのぬいぐるみを母親に捨てられそうになる。破れたクマのぬいぐるみを縫ってくれた祖母に想いをはせたのび太は、タイムマシンで昔に戻る。そこでは祖母に甘え、わがまを言っても許されている幼児の自分を見る。クライマックスで、のび太は祖母と直接会話して物語が終わる。授業で見せるポイントは、冒頭の「ぬいぐるみが捨てられそうになる場面」と、中盤の「のび太が祖母に甘えて駄々をこねる場面」、クライマックスの「タイムマシンで来たというのび太に祖母が“のびちゃんのいうことを誰が疑うのですか”というやりとりの場面」であり、全体の約3分の1程度の箇所に絞って見せる。

⑤授業の流れ：まず配布資料をもとに、提唱者のウィニコット（Winnicott,D.W.）による移行対象とは何かという主張を解説する。「映画おばあちゃんの思い出」は先に述べた3つのポイントに絞り、場面を選択して見せる。幼少期のおばあちゃんへの甘え体験が、どのように「ぬいぐるみ」と結びついているか考えさせるためである。

見せている間は、さりげなく教室の後ろの方で学生の様子をみるようにする。学生がどのように受け止めているか観察することは、非常に大切である。学生の集団の雰囲気にもよるが、クライマックスのシーンではすすり泣きもれる。これがとても重要なポイントである。映画の後、あらためて「子どもにとってぬいぐるみや毛布といったものに、どのような思い出がこめられているのか、ぬいぐるみを大切にされることと子ども自身が大切にされることがどれほど繋がっているのか」ということをゆっくりと説明する。そして、「保育者となったとき、今のことをどうか忘れないでいてほしい」と伝える。ここで私語をするような学生はほとんどいない。雰囲気がしんみりしているからである。そうした中で園児が移行対象をもっている場合の具体的な対処法について、それぞれ考えさせ、用紙に記入して授業を終える。

3. この授業の意義と課題

この授業の最も重要なポイントは、学生に授業の中で「感動」させるということである。気持ちが動くといってもよい。心理学で教える知識のほとんどは、目に見えない「構成概念」と呼ばれるものである。目にみえないがゆえに、学生にとって理解できないことも多い。

一方で、心理学が扱う内容は、ほぼ全てが自らの心に問い直すことが可能である。言い方を変えれば、自分にも少なからず経験がある内容が多い。しかし自分の経験と心理学で教える内容がしつかりつながるのは時間がかかる。特に保育者養成の現場では、知識を養成校で詰め込み、実地は社会人になってから身につけるという考えさえある。これでは、学生にとって面白い授業となくはない。知識として覚えるだけの授業でなく、深く心に残る授業をするにはどうしたらよいか。そこがこの授業を始めた出発点であった。学生の多くは心を動かし、それが知識と結びつく。ある意味で、これが心理学の授業としては効果的ではないかと考えるようになった。

一方で課題もある。著作権法によると、営利目的でなく、学校の授業で内容と関係がある場合、アニメ作品を教材として使用することは認められている。この法的な点に関する議論はまた別の機会に行いたいと考えているが、学校でアニメ作品を授業で使用する場合には、少なくとも授業内容と関係ある内容に絞って、その部分のみ上映するという、教師として良識ある姿勢が求められるように考える。また、アニメを大学の授業で用いるということには賛否両論があると思われる。既定の教科書や参考資料で行うことが無難なのかもしれない。いずれにせよ、現実に向き合って教えている学生にとって、何が最もよいのか考えながら、今後も模索していきたい。